1

ポルノ小説

ある駅の改札口で友人と待ち合わせをした。早く着きすぎて約束の時間までに３０分ほどある。ふと駅前の本屋が目に入った。しばらく眺めていたが入ってみることにした。数年前、魔がさしたとしか言いようのない衝動にかられ、長年にわたって集めた私なりの蔵書を古本屋に丸ごと処分するという暴挙をしていらい、新刊書を買うということはトラウマとなって本屋に足を運ぶことができなかったのだ。なぜあれほど愛読していた本を処分してしまったのか、悔恨は激しく人生における最大の失敗とさえ思って落ち込んでいるが、目前の書店は私を見えない力で招いている。もう一度待つ時間を確認して足を運んだ。

活字離れと言われているが、おびただしい新刊書が山積みになって所狭しと並んでいる。私の不勉強で、今やほとんどが知らない作家の作品である。狭い通路を通り過ぎたとき、ひら積みになっている書物のカバーが目を引いた。黒地に、ほっそりと浮かび上がるボブカットのヘアースタイルの女性。白い横顔、長いネックレスをもった手をかざして、何かを問いかけているようなしぐさ。そして下半分の深紅の帯に『伯爵夫人』蓮実重彦とあり、さらに銀色の文字で「三島由紀夫賞受賞作品」と書かれている。

仏文学者であり、東大の元総長の蓮実重彦であろうか。手にとりページをめくって著者紹介を見る。まさに蓮実重彦の最新作であった。躊躇することなく一冊を取り上げて

レジに向かった。

『伯爵夫人』は文学の薫り高いポルノ小説であった。ストーリーはと言っても簡単には表現できないが、時系列的には昭和１６年、太平洋戦争開戦前夜、旧制一高在学中の華族の嫡男二朗が、謎めいた事情で彼の邸の一角に同居している「伯爵婦人」と呼ばれる女性と、偶然街中で出会い、ホテルでの抹茶のお点前の席に誘われて、午後から夕方までの半日を過ごす。そのわずか数時間のあいだに紡ぎだされる幻想は、過去と現実が入り乱れて波乱万丈、活劇あり戦争ありの、白昼夢の世界が展開していくのだ。

そこで彼は「素性のわからなかった」伯爵夫人の正体を知ることになる。夫人は実際には、その世界では名の売れた倫敦の高級娼婦であり、華族であった祖父のセックスの相手もしたことがあった。その道のプロとしての多様なセックスの体験を経て、戦争のさなか、味方の暴発の流れ弾にあたって不能となった「素顔の伯爵」と呼ばれる男性と数年の間、愛し合っていたことから「伯爵夫人」と呼ばれるようになったいきさつを知る。

しかし主題はなんといっても童貞である二朗の「立派なもの」をめぐってのエピソードの数々であろう。もてあそぶ女たちの仕儀、あからさまに性器を表現する多数の言葉は、音読はもちろん、引用するのさえはばかられるが、むしろあっけらかんとして爽快

である。スポーツを連想させ、プレイそのもので、淫靡な匂いはまったくない。さらに伯爵夫人が、祖父の子供を、二朗と3日違いで生んだという陳腐な挿話や、性的不能の男性を愛した夫人の告白、また宝塚もどきの男装の麗人の暗躍など、三文小説のストーリーをなぞっているようで、薄っぺらな絵葉書を見るような虚しささえ感じ、辟易する部分もあるが、さすがはフランス文学者、映画評論家の著者である。

作者自身が「こうまで抜かりなく活動写真の絵空事を模倣してしまってよいものだろうか」ともらしているように伯爵夫人のあだっぽいしぐさ、「あそばせ」言葉から突如として「べらんめえ」口調になって本性を現すアングルの回転。映像の典型として戦争の場面が2度登場する。例えば6章の書出し「気の遠くなるほど川幅が広く……」から「浮きつ沈みつしながら対岸をおりていく」までの9行は、9章の冒頭とまったく同じ文章で繰り返されているのだが、この反復は故意なのか。いずれにしろ「銀幕に描かれる銃撃戦なんて所詮は殿方のお好きなスポーツの域を出るものではない」と言いながら、慰安婦として参加した現実の戦争の修羅場を語る伯爵夫人の描写は圧巻だ。戦闘状態の最中、部下を全滅の危機から救ったにもかかわらず、敵前逃亡のかどで自決を与儀なくされた森田少尉。その恩に報いるために復讐を誓って諜報員となった高麗上等兵の心情は、すべて絵空事のようなこの物語で唯一感銘を受ける場面である。

またルイーズ・ブルックスという、無声映画時代からほぼ２０世紀をとおして活躍したアメリカ生まれの女優の、トレードマークであつたボブカットの、黒髪の女性、（本

の表紙に使われているのはこの女優らしい。装丁が読者の購買意欲をそそるという証明のようなすばらしい出来栄え）も二人登場する。蓬子という「二朗兄さまの尊いおみお玉に触れたいと願っている青臭く、硬いつぼみの従妹」と、「黒のスーツに身を固め、エナメルのハイヒールをはいて飛び回る麗人。「こう見えても私は魔羅斬りのお仙と呼ばれ、多少は名のしれた存在でござんす」などと見得をきったりするスパイもどきの女は滑稽なほどステレオタイプだ。蓬子は幼馴染みの少女だが、二朗は豊満な女性たちの性のテクニックよりも、その未成熟な体に執着していたことはむしろ皮肉である。

「裸足の伯爵夫人」という１９５０年代に公開されたアメリカ映画があった。ジプシー女で、酒場で踊っていたダンサーなのだが、映画監督の目に留まり、スカウトされて大女優になる。やがて伯爵に見初められ、結婚して伯爵夫人となる。しかし伯爵は、戦傷によって性的不能者となっていることを告白する。彼女は性の欲望に耐えきれずに下男と不倫をし、身ごもる。それを知って嫉妬に狂った伯爵は、ついに二人を銃殺するのである。「素顔の伯爵」と「裸足の伯爵」とはパロディであろうか。二朗は映画好きで全部上映すると６時間もかかるという「愚かなる妻」という作品も見ている。その他映画通でないと理解できないような描写もあって一筋縄ではいかない。「もとねた」を知らないとこの小説はわからないよと作者に力量を試されているようだ。しかし、それがあからさまでないので、随所に挿入される活動写真の挿話は現実と幻惑のはざまにあっ

て、ＳＦ的幻想小説のようだ。

フランス文学者としての面目も躍如たるものがある。作者はフローベルの研究家だというが、『感情教育』（年上の女性による恋愛のてほどきはフランス文学の伝統）についてふれ、男女の儀礼のあれこれが語られていると思われる部分もある。また、筒井康隆の批評のなかに、旧帝国ホテルの雰囲気をよく表しているとして取り上げた「焦げたブラウンソースとバターの入り混じった匂い」という表現は、「ボヴァリー夫人」からの引用だと明かしている。（要するに文章の盗用だということである）。受賞会見でも述べていたが、いたるところに断片的な引用（盗用）に満ち満ちていると言うことである。登場人物も「ひたすら文士を気取る虚弱児童」とか、魚やの御用聞きや人力車の車夫などに欲情する友人の平岡とは、まさに三島由紀夫そのものであろう。さらに何度か反復されている「何処でもない場所」とは、三島由紀夫最後の作品、『豊穣の海』の４巻、『天人五衰』の最終章「何もないところにきてしまった」を彷彿させる。

三島由紀夫賞受賞での記者会見も話題になったことを後になって知った。不機嫌な顔で壇上に上がった８０歳の蓮実重彦は「受賞ははなはだ迷惑である」といい、「８０歳の老人にこのような賞を与えることは日本文化にとって嘆かわしい」とし、感想を求める記者の質問にけんもほろろだったらしい。しめやかに描きたいことを書いただけ、書

けそうだから書いたまで、という小説が三島由紀夫賞を受賞したことに戸惑いもあったことはたしかだったようだ。「小説は向かうからやってきた」「散文の研究をしているものならだれでも書ける程度のもので『伯爵夫人』は言うならば、全く知的な操作によるもので、パッションに駆られて書いたというものではなかった」と突きはなしている。

しかし「伯爵夫人」は評論「ボヴアリー夫人」を書いた影響が大きいとも明かした。この作品には、その１００分の１の労力も使っていないとも述べ、虚心坦懐にエンターティメントとして読んでもらえたらと傲慢と謙虚が入り混じったような会見の様子だと想像できた。

三島由紀夫賞の選者は５人、将来のある新人に与えるという建前らしい。もちろん、そうそうたる現代の作家たちだが、意見は割れたという。作品に最も共感したのではと思った平野啓一郎は「知的な意味では読後にこそ始まる小説なのだろうが、主人公の祖父が射精なしで女を狂喜させることが近代への絶望とほのめかせているが、私には付き合いきれない」と冷ややかである。私は高村薫の評が一番共感できた。次のようである。

「小説を生業としていないもう一人、蓮実重彦氏はまさに書きたいことなど何一つなくても小説は成立すること、一定の言語感覚とちょっとした創造の欲望があればどんな小説でも紡ぎだせることを示した。そして小説は意味や物語をこえて出ていくところに立ち上がることを氏は正確に知っているのだろう。『伯爵夫人』には小説作法や題材に新

しさはなく、洒脱で高踏的なデカダンの空気には既視感もある（略）。繰り出される言葉の運動そのものに一定の快楽を覚えるのは小説の勝利というものであろう」

もう何年も前になるが、フランスはポルノ小説解禁とかいうことで、市の図書館で借りてきて読んだ強烈な作品、作者は忘れたが『肉屋』とか『男の扉』『女の扉』という表題だったように思う。これが堂々と公立図書館に置かれていることに驚いたものだった。いまや性器に対してのあらゆる卑猥な言葉の表現は自由であり、『伯爵夫人』のように隅々まで行き届いた文学性があれば、大手出版社の選の対象になるのだろう。

しかし戦後、文学作品が猥褻か否かを法廷で争った事件もあった。１９５０年代『チャタレー夫人の恋人』（DH ローレンス著、伊藤整訳）は「文学」か「ポルノグラフィーか」で訳者の伊藤整が被告人になり、裁判沙汰になってマスコミをにぎわせたし、マルキ・ド・サドの『悪徳の栄え』（渋沢龍彦訳）もしかり、両方とも上告したが訳者は敗訴している。『悪徳の栄え』はしつこいほどの変態的な倒錯者の性を描いて、まさに「サド」「マゾ」の世界を作り上げた。当時は伏字を使ったり、訳に趣向を凝らしたり苦心したそうだが現在は完訳もあるという。

また１９世紀から２０世紀初頭のフランスの象徴主義作家、アポリネールは「奇書」ともいえる『一万一千本の鞭』という、明らかに「ポルノ」と言える小説を書いて長い間発禁処分になっていたが、やっと１９９０年に出版されて世に出ている。入手困難で

読んでいない。いま最も読みたい本の一冊である。日本では荷風が『四畳半ふすまの下張り』というなんともなまめかしい官能小説を書いているが、これもペンネームを変えてひそかに発表していた。純文学作家が名前を変えてポルノ小説を書くこともめずらしくなかったようである。「情痴小説」と称して大衆作家が塗れ場を書いた例は数多い。

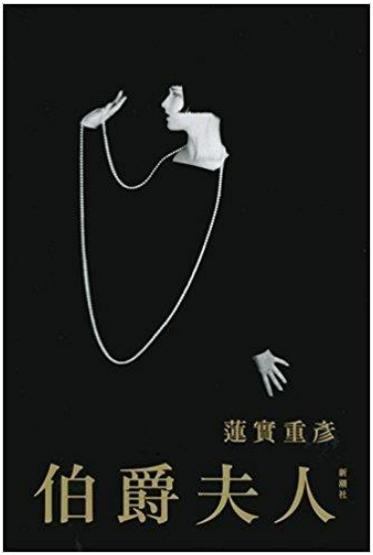
映画では、よく知られている『エマニエル夫人』が有名である。マルグリット・デュラスの『アマン』も話題になった。日本では大島渚監督の『愛のコリーダ』がすばらしい。これも日本の映倫をさけてフランスで制作したようだが、たまたまノーカットの作品を鑑賞する機会があってその芸術性に脅威の念をもった。「ポルノ」と言われる分野の芸術はフランスが得意のようで、「フランス書院」はれっきとした日本の出版社であり、お墨付きのポルノ小説を扱っている。

将来ある新人作家に与えるべき「三島由紀夫賞」を８０歳の文学者であり東大のもと総長でもあった蓮実重彦が受賞した。会見の全文を雑誌で読んだがさすがに知性にあふれていた。フランスの作家レイモン・ラディゲの言葉を引用し、あらゆる年齢にはそれにふさわしい果実が与えられるという。それを三島由紀夫文学賞の選者は摘み取ったのだという。ポルノ小説が８０歳にふさわしい果実かどうかは別にして、「向こうからやってきた」小説がポルノだったというのも興味深い。文芸評論や映画評論は多数あるら

しいが（これもあまり読んでいない）小説は三作目とのこと。

私自身についていえば、今や「後期高齢者」として蔑視される年齢にどっぷりと浸かっている。おまけに伴侶を失い、「社会的弱者」と言われて久しい。これからの行く道に年齢にふさわしい果実はあるのだろうか。いや木立は立ち枯れてもはや果実は望めないのではと思う。やがて私も、「どこでもない、」「何もない場所」に行きつくのだろう。

（２０１６年　１２月）



根来　澪子

私は今日、すこしおめかしをしてお出かけをする。黒地に大きなピンクの薔薇をあしらったジョーゼットの、ノースリーブのロングドレス。その上に、ベージュのレースのボレロを、袖を通さずに肩に羽織る。イヤリングは、思いっきり長く垂れ下がって揺れる銀色の輪。ネックレスもそれなりだ。ただハイヒールははけない。これまで、いつも七センチのヒールの靴をはいていたなんて嘘のようだ。幅広の、留め金のついた、いささか野暮ったい靴で我慢することにする。姿見の大きな鏡で点検をする。この一〇年ほどでびっくりするほどしまりのなくなった体のそこかしこは、どんなデザインのドレスを着ても隠しようのないほどの贅肉に覆われ、崩壊してしまった。年齢の経過の残酷さをあからさまになぞっている。

おまけに戸外は七月の太陽が、容赦なく汗ばんだ皮膚のそこかしこの「沁み」を浮き上がらせる。化粧の厚塗りは皺を目立たせる要因だとわかっていても、そうせざるを得ない。私は、黒、赤、黄色など、さまざまな色彩のゴブラン織りのポーチを肩にかけ、今日のダンスパーティに招待してくれた友人へのプレゼントがはいった伊勢丹の紙袋を持って戸外にでる。中身はドイツのブランド、「フェーラー」のバック。

まぶしくきらめく太陽。真っ蒼な空。まるで地中海のような青さだ。七月でこんなに澄み切った空もめずらしい。まぶしさに、思いっきり目じりに皺をよせて、ながめてしまった。自宅から駅まで歩いて一五分、おそらく、せっかく塗りこんだ化粧は半分ぐら

い崩れるだろう。バスに乗ることにして歩き始める。白いレースの日傘は、あまりにもこじんまりと華奢で、おびただしい日光を防ぐのに役にたちそうもない。

電車に乗って二十分、この近隣では一番グレードのたかいホテルのダンスパーティに出席するのだ。駅前の花屋で、真紅の薔薇の花束を作ってもらう。これもプレゼントのもの。今宵、花形で踊る友人は薔薇が好きだから。

ホテルのロビーの暗い照明にほっとする。ダンス会場はもっとほの暗い。ミラーボールの刺すような光が、稲妻のように交差する。あらゆる年齢の人たちがコンプレックスを抱かずに過ごせるような照明は、ホテルという多数の人々が集まる場所での「おもてなし」の表れであろう。三階の会場ではもう音楽がながれ、絨毯の上に、そこだけ板敷をしたフロアで踊っている人たちがいる。八人用の円形のテーブルが十四、五ほどフロアを囲んで並んでいる。私の名前で指定されたテーブルを探し、やっと一息つく。

一〇年ほど前まで、長い間、レッスンに通った「ダンススタジオＩ」の、年に一度のダンスパーティである。主として個人レッスンが中心のプロの教室のパーティはメインイベントとして、生徒のデモンストレーションが見せ場の一つだ。個人レッスンに励んでいる生徒たちはここぞとばかりにドレスやメークに気を使い、普段の練習の成果を披露する。

社交ダンスを趣味とする人たちは、その楽しみ方はいろいろであろう。公民館などで、ヴァリエーションを主として、ステップを踏みながら、カップルが音楽に合わせて踊っ

て楽しみ、コミュニケーションをはかるという、もっともポピュラーなやりかたがある。あるいは競技会を目的として、ダンスの技術を磨き、ひたすら上級にあがることを目指すスポーツダンス、そして私もそうであったが、プロのダンス教師の個人レッスンをうけ、身体の基本的な動きを学び、年に一度のパーティのデモンストレーションで、先生と踊ることを目的とするというもの。

ダンスの上達を目標として毎日を生きていたといえば、プロでもないのにと顰蹙を買うかもしれない。とんだ有閑マダムのお遊びと思うかもしれない。しかし私はもちろんお金もちの有閑マダムではないし、自堕落な生活をして享楽に身を亡ぼすほどの信念などない平凡な主婦として暮らしてきた。ただ踊ることが心底好きなだけだ。

幼児のころから踊ってばかりいたという。将来の夢は踊り手になるのだと口癖のようにいっていたという。

夢は、夢でしかなかった。女性としてごく普通の結婚をした私は、４０歳を過ぎたとき、子育てのピークがおわって、身辺のしがらみから解放され、「今でしょ」の、その時を迎えたのだ。長年眠っていた「ダンス」への熱望が再びよみがえったのは人生の後半生に近づいてからであった。

あらゆる芸術の中で、ダンスが最高の自己表現だと信じていた。音楽、絵画、文学よ

りも、肉体をもって演じるダンスの表現に惹かれた。ジャンルは問わない。クラシックバレーはもとより、モダンダンス、ジャズダンス、フラメンコ、ベリーダンス、舞踏ダンス、などなど。

「世の中には二種類の人間しかいない。踊る人間と、踊らない人間だ」と作家中山可穂は小説『サイゴン・タンゴ・カフェ』のなかで書いている。「たった一回踊ってしまったために人生を棒に振った人たち」のドラマチックな物語を描いた小説だ。タンゴダンサーだったプロの殺し屋、タンゴに出会ったためにヴェノスアイレスに行ってしまう若い娘。メコン川のほとりでバンドネオンをひく女。放浪の果てにサイゴンの場末でタンゴカフェを開いている、行方不明といわれていた流行作家の秘密。全編にピアソラのバンドネオンが響いているようなタンゴの輪舞。

私も社交ダンスの十種目の中でタンゴが一番好きで、中山作品に描かれているように時として「暗い情熱」に突き動かされることがあったが、一瞬の波紋のように心を横切っただけで、「道を踏み外すことなく」どうやら普通の主婦として人生を全うしそうである。

フロアで仲間たちが円を描いてワルツを踊っている大きな流れを、ぼんやりとながめる。

四十年間、熱中してきた社交ダンスをあきらめざるを得なくなった数年前のアクシデン

トのことを思いだす。それは思い出すのも苦痛な、致命的な転倒事故であった。

恒例の、ダンス教室のパーティが近づいてきたある日、レッスンの途中で、３０代のＩ教師が、「今度のデモで、ルンバの曲で「ハーレム・ノクターン」を踊ってみない？」とさりげなく言った。一瞬どきっとした。彼はとても若い。いつもデモで踊る選曲は現代風の　私などあまりなじみのない曲が主だったのに、昭和三十年代に全盛だったサム・テーラーの「ハーレム・ノクターン」とは。私の中で深く渦巻くものがあった。７０歳の身体の底を鋭く官能が貫いた。

――黒い闇の中で、そこだけが黄色く明るいライトの舞台のなかで、鋭くスリットのはいった黒のドレスを纏った黒人女性が「ハーレム・ノクターン」を踊っていた。場内に響き渡るテナーサックスの絞り出すような音量――。昭和３０年代、キャバレーという娯楽施設があった。ホステスが男性客を酒などでもてなすのだが、健全な店であり、当時よく会社の接待の社交場に利用されていた。たいてい円形に設えたホールの真ん中に舞台があって、酔客への余興として、様々なショーが繰り広げられていた。ほとんどが男性客である。しかし、上司でしばしば私をその店に連れて行ってくれる人がいた。二階の席にショーだけを楽しむ場所があり、私はショーが見たさに彼のあとについていくのが楽しみであった。ネオンサインをまきつけた外観も豪華であった。きっと、高級な店だったに違いないが、平成も四半世紀過ぎさった現在「キャバレー」という呼び名

の店でさえ、あまり存在しないようである。
私の記憶に鮮明に残っている店の名は「コパカバーナ」。日比谷よりの新橋の駅に近かったと思う。二階の客席の隅に、舞台を見下ろすのに絶好の場所があった。女性の私に相手をしてくれるホステスはいないし、酒を飲まない私は上司には関係なく、ひっそりと二階のほの暗い座席に座ってスポットライトを浴びて登場するダンサーにくぎ付けになっていた。
当然、ストリップショウなどではないが、ダンサーが醸し出す雰囲気はまさに淫靡であり腰のあたりまでスリットの入ったドレスはセクシーそのものであった。「ベサメ・ムーチ」らは情感豊かに踊った。
私にとって彼女たちはいわゆる「ショー」を踊るダンサーではなく、アーティストそのものであった。そして極め付きは黒人女性の「ハーレム・ノクターン」。彼女は黒いつややかな肌にまとわりつく漆黒の、縮れた長い髪を振り乱し、挑みかかるような瞳で客席をにらんでいた。彼女の細身のシルエットのしなやかな動きは私を魅了した。私は「彼女でありたい」と切望した――。

「彼女でありたい」という切望は高齢になった今、かなえられそうだ。家に帰ってさっそくCDで聴いた。さまざまな情景が渦巻いた。

ニューヨーク、マンハッタン街のハーレムに集う人たちの闇、そしてまた闇の深い底

から湧き上がるノクターンの調べ。サム・テーラーのサックスは、うめくように、叫ぶように、私の胸をわしづかみにする。

ダンスに必要な肉体のばねがとうになくなっていることも、「思い入れ」だけではどうにもならないハンデティも、もちろん意識している。踊りを習い始めたときすでに、肉体はピークをすぎていたのだ。日常の時間帯に余裕ができたから、というありきたりな理由で習い始めたダンスであった。しかし私の筋肉は年齢よりも柔軟でスタンダードにおけるホールドの姿勢や、ラテンのウオークなど、基本はある程度マスターすることができ、それなりに先生にも認められ、楽しんできた。５０歳、そして６０歳になっても自分を訓練しさえすれば大丈夫と信じていた。７０歳すぎて、踊った後の疲労感、バランスの乱れに苦しむようになってはじめて真底から蝕んでくる肉体の「老化」という現実に突き当たったのである。年を経るごとに老成していく他の芸術とちがって肉体に頼らざるをえないダンスの致命的なさだめである。

もう「大勢の人の前で踊るデモンストレーション」は無理だとあきらめかかっていた。そんな私を動揺させたアメリカのテナーサックス奏者サム・テーラーの「ハーレム・ノクターン」。

若い時からジャズを聴いて、ブルースを聞いて、夜の巷を彷徨ってきた私の、それはまさにもう私のダンス人生では二度とない、最後のチャンスだとおもった。

私はデモに出演することをＯＫし、すぐにレッスンに入った。振付のうまさにかけて

は定評のあるＩ先生である。何かを掴もうとするように、腕を大きく広げ、薄暗い街灯の陰にたたずみ、なすこともなく、あたりを見回す女のけだるさ、通りがかりの男が私をリフトする。私は男にささげられて宙に舞う。スラムの街をただよう女たちの退廃のムードを出したいと思った。まぶしい若さでは表現しえない、熟しきって枯れていく年老いた女の悲しみのようなものがにじみでればと思った。

そのころ（現在もだが）、私に家族はなく、毎日の時間はまったく私の自由になっていた。家にいるときでもいつもＣＤで「ハーレム・ノクターン」を聴き、音程を外さないようにリズムの研究をしていた。まさに毎日がダンスのための日々に明け暮れ、思いがけない充実した日々はすぎ、秋は深まっていった。

事故は突然やってきた。当時、私は自転車を愛用していた。徒歩で１５分はかかる私鉄沿線の駅までの往復や、スーパーへの買い物などすべて子供の時から使い慣れた自転車であった。自分の足のようなもので、その運転に何の不安はなかった。その日も、ダンスのレッスンのために駅に向かったのだが、いつもは練習用の、フレーヤーのたっぷり入ったスカートをバックにいれて持参し、教室の更衣室で着替えをするのだが、それが面倒になり、自宅から着替えていくことを思いついた。練習用だといってもダンス用のドレスであるから、特殊なデザインでおびただしい襞がたっぷりと入ったロングスカートである。しかし、駅までは人通りの少ない路地があるし、コートを羽織ればあまり

気にならないと思い、気軽に自転車に乗った。

走り出して5分に満たないころ、突然、快調にスピードをだしてすべっていた自転車に急ブレーキがかかり、勢いよく横転した。私はコンクリートの道路に抛りだされたのだ。我ながら理解しがたいことであったが、肩の痛みもさることながら、起き上がろうとしても起き上がれない。やがて理由が分かった。気が付かなかったのだが、スカートのすそが後ろの車輪に巻き付いてしまい、車輪が動かなくなって転倒したのだ。路地で人通りの少ないのが幸いなような、でも手助けをしてくれる人がいないと、自分の力だけでは立ち上がることもできない。痛みをこらえて必死に車輪に絡みついたスカートを解こうとしていると、たまたま中年の女性が通りがかった。私の苦境を察して彼女は、「あらあら大変」などと言いながら、車輪に食い込んだスカートを引っ張り出すのを手伝ってくれた。まさに救いの神と深く感謝し、よろよろと自転車を押しながら、自宅に引き返した。

痛い。ジンジンと痛い。肩を出してみると、黒々と内出血をしている。これはただ事ではないとおもい、それでも駅前の整形外科医院まで歩くことができた。

レントゲンの結果は「鎖骨骨折」であった。胸一面にあざが広がって重病人の心境であある。幸い複雑骨折ではなかったので、手術は免れた。というより、もう年配なので形にこだわることもないだろうから「鎖骨ベルト」で胸を固定して自然に骨がつながるのを待つ治療法を選んでくれた。

それから三か月間、私は「鎖骨ベルト」で腕と胸をきつく固定するベルトを上半身に巻き付け、寝るときも外すことができず、入浴は半身浴でまさに身障者の気分を味わった。一人で暮らしているので、下着の着替えもできず、一日おきに整形外科の看護師さんにお世話になるために通院した。固定していると痛みはないのだが、洋服で隠しても盛り上がった肩の線は露わであり、気分のすぐれない日々。秋から冬へと季節が移り変わるほどの三か月間、成すこともなく、自分だけの世界に閉じこもった心境の長い、長い歳月であった。

三か月たってレントゲンの結果、無事折れた鎖骨がつながったと知った時の解放感は、重病を克服したときの荘快感で思わず友人に電話をかけまくったほどであった。しかし腕を自由にうごかすまでにはもっと歳月を必要とし、私は執着していたダンスパーティのデモンストレーションを諦めざるをえなかった。そのことが引きがねになって、私の身体は一気に崩壊していく。

「今日は来てくれてありがとう」パンダのように目の周りをアイシャドウで隈取り、つけまつげを二重につけて大げさに化粧をした友人がニコニコしながら近づいてくる。胸元を大きく開け、スパンコールの施された鮮やかなドレスを身に着けている。「おめでとう」私も彼女に負けない微笑みで応じる。１０歳ほど私より若い彼女と、も２０年にわたるお付き合いで一緒にレッスンをうけてきた。彼女は残り、私は教室を去ってもう

数年になる。今夜は彼女の晴れの日、彼女のデモを観るために私はパーティに招待されたのだ。ワルツを踊るという。

「どう？　デモの仕上がりは」「だめなの、ヴァリエーションを覚えるだけで精一杯、つぎつぎにステップを踏むのが大変、Ｉ先生の振りつけはほんとうに難しい、バランスを崩すし、スイングをきれいにするほどもう足は強くないし、私もデモは今年が最後かもしれない。長いこと見に来ていただいたけど、来年は出来そうもないの」小声でしんみりとつぶやいた。

そうだった、彼女も６０歳をだいぶ過ぎていた。いかにアマチュアのダンスとはいえ、やはりお客に見てもらって見苦しくない程度のテクニックの技が必要である。それができなくなったら消える以外にない。踊る本人が一番よく自覚している。

アマチュアなりに自分に納得のいく踊りがしたいのだ。気休めを言って慰めはしない。

彼女と踊った日々が突風のように私の内部を吹き抜ける。デモの日が近づき、二人でＣＤラジカセをかかえ、郊外の原っぱにでかけて何時間も練習しあったこと、音量で近所に迷惑をかけることをはばかったのだ。

ダンスホールの設備をもつ河口湖半のホテルに泊まりがけでかけ、ホテルが女性客のために用意してくれているダンスの相手（その男性を、リボンちゃんとよぶ）にエスコートされ、ラテン、モダンふくめて十種目に及ぶヴァリエーションを踊りまくったこと、

近郊の市にある行きつけの小さなダンスホールで、マスターに相手をしてもらい閉店まで踊ったこと。ホールのオーナーのママは私より数歳年長だったが、「死ぬまで踊りましょうね」と二人で約束した。命が終わるまで――。７０代の男性が、ダンス教室でレッスン中に心筋梗塞で倒れ、そのまま逝ってしまったということが話題になったことがあった。肉体の限界まで使い切ったのだろう。私もそうでありたい。魂を失った私が床の上に横たわっている幻想。

透明なフラッシュのなかに浮かび上がる一緒に踊った何人かのタキシード姿のパートナーたち。その思い出は私の奥深く沈んでもう姿を現すことはない。

本当に今夜がラストチャンスであった。私は立ち上がった。自分の履いている靴を恥じたが、そんなことはどうでもいい。中央に設えたホールにでていった。大学のダンス部の学生であろうと思われる若いリボンちゃんに近づいていった。

「踊ってくださいません？」額にうっすらと汗をかいていた童顔の若者は驚いたように私を振り向いた。パーティが始まった当初から一曲も踊らずただ眺めていただけの私が突然近づいて行って申し込んだのだ。

「ええ、勿論、お願いします」彼は私をホールの空いている場所にとエスコートした。私に何は実年ぶりかでモダンダンスのホールドを組んだ。「お上手ですね」。汗ばんだ体臭をじっとりと匂わせて若い男性は言った。「そう、長いこと踊ってきたから、キャリアはあるの。でも今夜でおしまい。」「え？」彼はきょとんとしていった。「もう年だか

ら……」「そんな」彼は笑った。「本当にダンスが好きな人は年なんて関係ないんですよ。倒れるまで踊るんですよ」そう、倒れるまで――

私は明日倒れても不思議はない。声にならずにつぶやき、彼の肩にもたれて踊った。タンゴの曲のなかに死をみた。身体中から力が去って、宙を浮遊するように私はたゆたう。やがてフロアに私の亡骸があった。こんなにも優しく、こんなにもやわらかい死があるだろうか。闇夜の衣をまとった私は、今、この時のためだけに在る。踊りつかれた私のこの一瞬の、愛に包まれた死。

（二〇一五年一二月）